

# シヨクダイオオコンニャク (*Amorphophallus titanum* (Becc.) Becc.) の開花報告

上野明楽

## 導入経緯と開花記録

本種は世界最大の花を咲かせる植物として知られており、全国の植物園で栽培されている。本園でも10年ほど前から栽培していたが、いずれも枯死しており、開花に至っていなかったが、2024年10月に筑波実験植物園より寄贈していただいた約10kgのシヨクダイオオコンニャクの塊茎が開花したため記録した。

## 植え付けから開花まで

令和6年10月29日に殺虫殺菌処理をした腐葉土と赤玉土中粒を基本用土として鉢植えで栽培を開始した。芽が地表に出るまでは灌水をせず管理した。令和7年5月26日に地表上への発芽を確認し灌水を開始した。5月31日にも芽が膨らみ成長しているのを観察したが、10kg程度の重さで開花した例がなかったため、花芽ではないと考え観察をしていなかった。仏炎苞と思われるものが展開し始めた6月16日に蕾を確認し、そこから記録を開始した(写真1)。

6月19日から測定を開始し、6月30日に開花した。

なお計測についてはコンニャクの鉢の地表面から測定しており鉢の高さは含めていない。

6月19日

伸びてくる付属体を確認し、記録を開始した(写真2)。

鉢の表面から付属体頂点の高さが59cmであった。

6月22日

鉢の表面から付属体頂点の高さが77cmであった(写真3)。

6月23日

鉢の表面から付属体頂点の高さが83cmとなった。一日で約6cmずつ伸長していった。

6月26日

鉢の表面から付属体頂点の高さが97cmとなった。付属体の伸びが顕著になってきた(写真4)。

6月30日

鉢の表面から付属体頂点の高さが約106cmと

なった。

夕方に腐敗臭がし始め、仏炎苞が開いてきたためこの日を開花とした。

仏炎苞の広がり幅は約52cm、付属体の付け根から先端までの長さが82cm、幅は124mmであった。また、付属体の温度は赤外線温度計を用いて測定したが、室温28℃に対して付属体が34℃であった。この時、湯気は確認できなかった(写真5、6)。

7月1日

付属体の高さは変わらず、仏炎苞の広がり幅は47cmで、開花時より少し収縮した(写真7、8)。

7月2日

仏炎苞の広がり幅は23cmとなり開花時の半分程度となった。

7月3日

午後5時頃には付属体が傾き始めていた(写真9)。

7月4日

付属体が倒れていた(写真10)。この時、仏炎苞の一部を切り取り、雄花と雌花を観察できるようにした(写真11)。

## 所感

本種は国内の植物園で開花するようになったものの、30例程度と少なく、中国地方ではときわミュージアムに次いで2例目の開花となった。開花するまでに何らかの原因で枯死することがあるため、栽培には注意が必要である。開花すると花の希少性と世界最大の花としての知名度もあって来園者が増加すると予想される。

今回は開花の通説である30kg程度の塊茎ではなく開花見込みのない塊茎であったため広報が遅れたのが反省点であった。

開花で塊茎が弱っている可能性もあるため栽培の見直しを図るとともに線虫などコンニャクを枯死させる要因を排除する等細やかな観察が必要となる。

最後になりましたが、本個体を寄贈していただいた筑波実験植物園の皆様へ感謝申し上げます。



写真1 6月16日の状態



写真3 6月22日 高さ77cm



写真2 6月19日 高さ59cm



写真4 6月26日 高さ97cm



写真5 6月30日 開花日午前中の状態(未開花)



写真7 7月1日



写真6 6月30日 開花した状態 午後8時頃



写真8 7月1日 夕方



写真9 7月3日 夕方 付属体が傾く



写真11 7月4日 花芽らしきもの(未開花)



写真10 7月3日 付属体倒れる(未開花)